

おおなんちょう

邑南町 (島根県)

邑南町研修プロジェクト

地域資源を活用した研修制度による交流・定住促進

【取組の概要】一人ひとりの思いを大事にし、繊細で丁寧な日々の コーディネートがまちを愛する人を育て、定住を生み出す

邑南町の石見地域（旧石見町）にある「香木の森公園」は、地元ボランティアグループがハーブを植えたことから、ハーブ公園として知られるようになり、広島をはじめとする県外からの観光客が多く訪れる観光スポットとなった。香木の森公園が軌道に乗ると、直売所をはじめとしてレストランや観光農園など様々な民間の施設も整備され、町に徐々ににぎわいが広がった。

香木の森公園では、1993年頃から都市農村交流事業として、都会の若い女性を公募し、1年間滞在して農村体験をしてもらう研修制度を設けた。このユニークな事業をマスコミが取り上げたことで、石見町（現邑南町石見地域）の名前は広く知られるようになり、観光客とともに多くの視察が町を訪れるようになった。研修後、女性たちの中には、そのまま町に残って結婚したり、就農したり、香木の森クラフト館の職員として勤務したりする人もでるようになった。2008年までに89名が研修を受け、そのうち定住者が15名、町内で結婚した人は13名に及ぶ。また、2000年からは本気で就農を希望する人のために、農業研修事業を開始し、2008年までに16名が研修を修了している。このうち定住者が7名、うち結婚した人が3名になった。香木の森研修生と農業研修生のうち、結婚した研修生たちに25名の子どもたちが誕生し、町の定住人口の増加と若返りにつながっている。



香木の森公園（香木の森 ハーブガーデン）

1. 「香木の森公園」における都会の若い女性を対象とした研修制度

広島とのつながりで発展してきた町「邑南町」

邑南町は、2004年10月に旧石見町^{いわみちょう}、旧瑞穂町^{みずほちょう}、旧羽須美村^{はすみむら}の2町1村の合併で誕生した。いずれの町村も島根県の中央部に位置しながら、産業・経済は県庁所在地の松江市よりも、広島市とのつながりの方が強く、邑南町の西南を浜田自動車道が走っていることから、高速道路経由なら、車で2時間半の距離の松江に対して、広島市には車で1時間程あれば行くことができる。

邑南町石見地域（旧石見町）の人口は昭和30年代の約11,000人をピークに減少に転じ、現在は約6,000人、2,000世帯程が暮らす。総面積の約8割が山林の中山間地域で、農林業が主要産業となっている。日中の寒暖の差が大きく、霧の発生が多いため、明け方には雲海が広がることもある。

この地域では、かつて出稼ぎが多く農業の機械化・合理化を推進したため、昭和40年代には既に圃場整備が90%以上終わっていた。並行して企業誘致も行い、大手自動車メーカーの系列企業では当時450人以上が働いていた（現在は100人を切っている）。

圃場整備と企業誘致のおかげで、農家は兼業農家となって現金収入を得ることができ、農業には大型機械が導入することができたが、合理化により、農薬や化学肥料が盛んに使われたため土地が地力を失い、コメの収量が落ちてしまった。そういった反省点もふまえ、旧石見町では、何軒かの農家が有機農業に取り組み始めた。後に、旧石見町は「ふるさと創生事業」を使って、1991年から10年間、実験圃場での有機低農薬栽培の研究活動を実施。また、農協と町の共同で堆肥施設を整備し、土づくりに力を入れてきた。

1980年代になると、生協ひろしまとの交流を通じて、消費者の求めるものを追求した農業に力を入れはじめ、産直事業にも取り組むようになった。1987年からはグリーンボックスに季節の野菜1,000円分を詰め合わせて消費者に送る事業を開始し、現在でも品目や量を工夫したセットを出荷している。また、消費者と生産者の信頼関係の構築のために「産消交流会」を開催し、稲作交流体験やイチゴ狩りなどの交流事業を続けてきた。

ボランティアで支える「香木の森公園」

旧石見町にある「香木の森公園」は、林業者の雇用安定のための国の事業「林業構造改善事業」を活用してできた公園で、約4.5haの敷地に、月桂樹やキンモクセイなどの香りを漂わせる香木を植えたことが、その名前の由来である。公園には林道や駐車場が整備され、1991年に町営の公園として開園したが、開園当初にはまだハーブ公園は整備されていなかった。

香木の森公園の中に「ハーブガーデン」ができるようになったのは、地元ボランティアの協力があったからだった。地元には、高校を拠点にハーブを栽培するグループ「ハーブ

に親しむ会」というボランティアグループがあり、町役場企画担当職員がグループに依頼し、香木の森公園の下草としてハーブを植えて、「ハーブガーデン」を作った。グループは、ボランティアでタイムやラベンダーなどのハーブを植え、これが徐々に評判となって、広島などから女性を中心とした観光客が増えていった。

当時、町には、他には際立った観光施設がなかったため、集客機能がある香木の森公園には期待が寄せられた。香木の森公園の周辺には、レストラン、バンガロー、クラフト館、農林漁業体験施設「香遊館」、温泉施設「いわみ温泉 霧の湯」などの観光施設が、次々と整備されていった。ハーブの人気が高まり、ハーブの苗の生産と販売、ハーブティーやお菓子などのハーブを使って開発した商品、リースづくりや好きな苗と鉢を選んで植える「寄せ植え体験メニュー」など、ハーブを利用した商品メニューが充実していった。こうして次第に、公園一体がハーブをテーマとする施設へと進化していったのである。



体験工房クラフト館（左：館内のクラフトショップ、右：香木の森オリジナルのハーブティー）

都会の若い女性の研修生を公募

都会に住む若い女性を対象とした農村体験の準備が、1992年に旧石見町で始まった。この農村体験制度は、都市農村交流や観光振興はもとより、若い女性に田舎暮らしを体験してもらうことで、町内に新しい風を取り入れ、同時に情報発信していくねらいがあった。地域性は簡単には変えることができないが、若い女性という地域に溶け込み安い存在を受け入れることで、新しい流れを作りたいと考えた。

香木の森公園での実際の研修生受入れは、1993年から、「ゆとり体感インアロマティック石見」として、「旧石見町の豊かな自然の中に、都会の女性を招き、都会では味わえない“ゆとり”を体感してもらい、旧石見町へのIターンを促進し、若者定住の起爆剤としよう」と考えて始まった。研修期間は1年間で、研修生には宿泊施設「香賓館」が用意され、毎月の滞在費として7万円が支給された。1週間の作業はハーブ園の中だけではなく、地域にも出かけて、地元の農家で実際の農業や工芸などの研修も行う。初回の公募の際には、6人の募集に



研修生の宿泊施設「香賓館」

対して70名以上の応募があった。この研修制度「ゆとり体感インアロマティック石見」は1993年から1996年まで4年間実施され、1期生から4期生までの24人が研修を受けた。

このユニークな定住制度はマスコミに取り上げられ、テレビでも全国で紹介された。そのおかげで多くの視察団や取材が訪れるようになった。

研修生と地元住民との活発な交流

香木の森公園が盛り上がりを見せる一方、住民にも変化が現れた。研修生には、町内のいくつもの自治会から、花見会、運動会、忘年会などイベント毎に誘いの連絡が入った。自治会からの誘いに対して、香木の森公園の担当職員は、研修生の窓口となって自治会からの誘いを受け付けて、研修生にその都度、参加の意志を確認した。何回か誘いに応じるうちに、研修生は自治会の様子が分かるようになり、慣れてくると担当職員を通さずに直接連絡をするようになるなど、交流が広がっていった。元研修生の話では、各自治会は、研修生の歓迎会をしてくれたり、様々な行事に研修生を招待した。同じ日に運動会など2つの自治会から誘いを受けると両方とも梯子して参加したこともあったという。そんな若くて気さくな研修生たちとの交流で、地元の住民たちも盛り上がるようになり、住民自身に邑南町の良さを気付かせてくれる機会にもなった。研修生たちの指導にもあたってきた「ハーブに親しむ会」の男性指導員は、「研修生たちは新しい風を運んでくれる」と言う。

自治会からの誘いは、研修生から見れば「おじさん」からが多く、地元の若者との接点は多くなかった。たまに「おじさん」たちの中で、「うちの孫はどうか」と研修生に訪ねる人がいるくらいだったが、それでも、研修生と地元の男性との出会いもあり、研修終了後も結婚して町に残るといった人も出てきた。

研修生制度は第2段階へ

1993年から96年までの4年間行われた研修制度「ゆとり体感インアロマティック石見」のあとを受けて、翌1997年からは少し形態を変えて、「石見町研修制度」が(財)ふるさと島根定住財団(※)の補助を受けて始まった。

それまでの1期生から4期生までの研修生は、研修生と呼びながらも、目的は体験・交流ということもあって、受け入れ側のスタッフは研修生にお客様扱いで接してきた面もあった。しかし、一部の修了者からは、ハーブの研修はアルバイトやパートの感覚ではなく、仕事に責任を持ってもらえるようにきっちりとした方がいいのではないか、という意見があったため、農村での体験を週2日割り当てていたのを廃止し、週5日間、香木の森公園での研修とした。

また、受入れ期間を4月スタートではなく、2月スタートに変更。ハーブの育苗が2月に始まり、植え付けから成長までを管理するというのが主な理由だった。受入れを年度半

ばの2月からにしたことで、一般の新卒者はもちろん、社会人も応募しにくくなり、応募者数は変更した年度から少なくなったが、研修の中身はそれまでの受入経験を活かしてより充実していった。

※島根県へのU・Iターン促進と県内定住を目指す組織。1992年に島根県の出資によって発足。

周囲の対応と協力

研修生は、公園の中の香賓館という宿泊施設に住み、家賃・光熱費として3万円を町に支払う。香木の森公園の付近には電車はもちろんバスもなく、車は必需品で、生活にはその維持費・燃料代がまず必要となり、さらに研修生によっては健康保険料もかかってくる。1期生から4期生までの研修生に対する支給額は7万円だったが、生活が厳しく、地元との交流にもいつも手ぶらが多く申し訳ないと感じていた。そこで、1997年からの「石見町研修制度」では、町の予算と県の定住事業からの補助金とで合わせて一人13万円を研修生に支給するようになった。月額13万円という金額は、香木の森公園で働く臨時職員の月給より高く、以前も一部の地元関係者からは、外部からの来訪者に、なぜ7万円も支給するのかという声があったが、担当職員は、「地域交流のために必要」と答えてきた。

研修生への指導や研修生の地域交流においては、地元住民による地道な協力が支えとなってきた。JA生活指導員を定年退職後、社会福祉協議会で活動してきた女性は、研修生に福祉研修の講師として地域福祉について指導をする一方で、香木の森公園内で直売所（後述）を開催するグループの代表をしていたことから、その活動を通じて研修生と様々な立場の地元住民とが自然に出会うきっかけを作り、研修生たちが地域に出かけていけるよう道を開いた。研修生たちが共同生活などに行き詰まった時には自宅に呼んで相談に乗るなど、研修生の母親役を担ったりもしてきた。

また、先に述べた「ハーブに親しむ会」の男性指導員も、研修生に野菜作りや食品加工を指導するかたわら、研修生とともに町内にいる農業の達人の「おじいちゃん」「おばあちゃん」との交流に出向いて、研修生と地元との接点を作っていくなど、様々な側面から研修生を間接的に支援してきた。

担当職員は行政職員という立場のため、研修以外の活動については対応しきれない部分があったが、こうした地元住民が研修生の相談役となり研修制度を側面から支えることにより、公式のプログラムとは違う場面での研修生の農村体験が可能となった。

2. 「香木の森公園」と研修制度を核とした様々な取組の広がり

民間事業者の出店で賑わいが増した香木の森公園

香木の森公園内では、土・日・祝日に「香楽市」という農産物の直売所が開かれている。香楽市は、前述の研修生の母親役の女性がリーダーとなっている邑南町石見地域の婦人グループ「おふくろネットワーク石見」が1996年、県の補助を受けて開いた。香木の森公園に観光客が増えて、観光客の飲食はレストランだけでは足りなくなってきたため、地元住民の手作りのすしなどを売り始め、同時に有機農業による野菜やジャムなどの加工品を販売するようになった。中には、カブトムシを袋で売る農家も出てきて、香木の森公園に来た子どもたちに大人気となった。遠く広島からわざわざ新鮮な野菜を求めに来る人もおり、香楽市は、農家と都市住民との交流の場となってきた。出荷会員は100人近くに上るようになり、自分の作ったものが直接売れるという楽しみが、この地域の住民を元気にしている。

また、香木の森公園の近くでは、地元の土建業者が農業に参入し、さくらんぼやピオーネ（葡萄の品種）の農園を香木の森公園に隣接する形で作り、観光農園としてさくらんぼ狩りなども始めるようになった。さらに、飼料にこだわりを持って育てた地元の乳牛から採れる牛乳とアイスクリームなどの乳製品を販売する店舗、農協の蔵を移築した店舗で地元産のフルーツの販売や地域食材を提供するレストランもできて、香木の森公園の周辺はにぎやかになっていった。



農協の蔵を移築したレストラン



地元の乳牛の乳製品を販売する店舗

農業研修も始まる

邑南町では、2000年からは、これまでの香木の森公園の中のハーブガーデンでの研修（香木の森園芸福祉コース）に加えて、農業研修（農業コース）も開始した。農業研修は、ハーブガーデンでの研修とは異なり、研修の成果として農業で自立して暮らしていけることを目指す。当初、農業研修については、研修生が自己資金を持っていないということも多く、担当職員は上手く就農に結びつくケースはそんなに期待できないのではないかと感じ

ていた。だが、担当職員自身が、1週間の農業研修を受け、そこで研修に参加している人の話を聞くうちに、本当にやる気がある人は熱意が違うことに気づき、農業研修は熱意や計画性について、事前にきっちり審査すれば就農に結びつく、という見通しが立ってきた。

邑南町の農業研修は、農家と一緒に働くことが条件になっており、農家は責任を持って、研修生をマンツーマンで指導する。研修生は、常に指導にあたる農家のやり方に従うため、1日の労働時間は決まった時間とは限らず、休みが定期的にとれるわけではない。最近、農業研修では中途辞退者も出たが、「就農の適合性、可能性を見極めるためにはこれも選択肢」と職員は言う。

農家を限定して研修をしているのは、成功している農家のスタイル全てを学ばないと農業は成功しない、との考えであり、「1年間その農家にずっと付いて研修すれば、その農家はその後ずっと応援してくれますよ」と担当職員は研修が終わってからも、研修生の自立を長い目で支援してくれるだろうと、受入農家を信頼していた。町の職員は、「応援してくれる農家に報いるぐらいの意地を見せてください」と、研修生にお願いしている。

町の職員のもとに、就農を希望して研修生になりたい、と直接相談に訪れる人もいるが、中には「この人では無理だ」と判断するケースもある。就農希望者の中には、社会生活の中で精神的なストレスを抱えている人もなかにはいるが、就農するというのは、「都会での生活がダメだから農業でもしよう」というような甘い気持ちでできるものではない。また、就農意志の弱い研修生を受け入れてしまうと、農家の負担が増えることも危惧される。町の選考会では、研修希望者が本気で就農できるのかを客観的に判断し、事前に見抜かなければならない。農業への信念はもちろん、資金等についても計画性を持っているか、など総合的に見て審査している。

研修制度が始まって、多くの研修生が育っていった。当初、研修生は、当初地元から、「お客さん」、「よそ者」という目で見られていたが、研修生が地域に出かけていって交流を重ねるうちに、事業の3年目くらいからは、自然な形で地域に受け入れられるようになった。地元の住民が「何の研修に来た?」「今は何しとる?」と、声をかけてくれるようになるなど、この調子で行けば、研修生が地域で定住や就農を希望しても、受け入れてもらえるのではないかと、職員は感じている。

福祉の場になっていく香木の森公園

香木の森公園には、地元住民に香木の森ボラメイトとして登録してもらい、園芸福祉活動等(※)に参加してもらおう制度がある。ボランティアには、年間スケジュールに沿って活動を行う「園芸福祉ボランティア」、毎月一度の草刈を行う「公園管理ボランティア」、クラフト館スタッフとともに活動する「平日ボランティア」があり、2007年度には、延べ200名がそれぞれ2時間半ほどの活動を行った。

裏方としてハーブガーデンをスタッフとともに支えているのが障がい者福祉施設で、みやげ物の加工や、ハーブガーデンにやってきて草引きなどの作業もする。邑南町では、地



園芸福祉のモデルガーデンとボランティア

域での助け合いの中から、障がい者福祉の活動を早くから展開しているため、住民の障がい者への理解が広がっており、地域と障がい者の交流が積極的に行われている。邑南町石見地域には、障がい者の施設と学校があり、園芸福祉の交流を進めている。

また介護予防等の事業により、高齢者を対象にしたクラフトやガーデニングの講座も開催され、各地区公民館に出かけて、地域住民との交流を深めている。

ハーブガーデンの一角では、ハーブの苗が販売されており、その苗は、香木の森公園のスタッフが育てたもの以外に、授産施設や農家に出荷してもらっているものもある。「正直に言えば、値段はスーパーなどの市場価格と比べて安い、というわけではありません。福祉の一環としてやっていることを、町内では理解してもらっています」と、職員は言う。「香木の森公園のスタートの時には作業所を併設して、障がい者の方にここで働いてもらったらいいのではないか、という案もありました。結局、そういうスタートにはならなかったのですが、形としては現在、段々と福祉活動の場になってきています。」

※NPO法人日本園芸福祉普及協会は、「園芸福祉とは、花・果物・野菜・その他のみどりの栽培や育成、配植・配置・交換・交流、管理・運営などを通じて、みんなで幸せになろうという思想であり、技術であり、運動であり、実践である」としている。

レポート

（公園スタッフ（元研修生）へのインタビュー）

働く人の声を大切にする職場

香木の森公園には、元研修生から公園スタッフとして残る人も多い。研修生の指導に当たって来られたスタッフ（元研修生）にお話を伺った。

●香木の森公園の研修生に参加したきっかけは？

「青年海外協力隊でヨーロッパに行き、ヨーロッパではハーブというのは身近な存在で、障がいを持っている人や子どもなどに、園芸療法という形で取り入れられていることを知りました。日本に帰って勉強したいと思っていたところ、香木の森公園の研修生の募集記事を新聞で見て応募しました。」

●邑南町のいいところは、四季とこだわりを持った人々

「邑南町は、四季がはっきりしているというのが魅力です。私の担当は育苗ハウスですが、ほとんど外と変わらない仕事場で作業をしています。雨の音、風の音が聞こえて、自然がはっきりしています。それと、こだわりを持って暮らしている人が、香木の森公園には集まってきて、出会えるというのが魅力です。町の人には、そういう人ばかりじゃないのは分かっていますが、ここでおいして、よくしてくださっている方たちは、農業にしても地域活動にしても誇りと自信を持ってやっていて、その人達の情熱は魅力的ですね。都会にいと、世代がばらばらな人達と熱く語るきっかけというのはなかなかありませんし、そんな場に居られるというのもないですが、田舎にいと様々な世代の人と話すきっかけがあり、いろんなことが良くも悪くも耳に入ってくるので、それによって考えさせられることは多いように感じます。」

●研修生は個性的で、問題意識を持つ人たち

「ここに来る研修生は、個性の強い人が多いです。5期からずっと研修生を見てきましたが、研修生は都会を離れて1年間、田舎で暮らそうというのだから、何かがあっけてきています。失恋してという人もいたし、自分探しの人もいたし、何をしたいかわからない人もいたし、ここが自分の人生の通過点になると、認識してきた人もいました。料理人になるためにとか、染色をするために、ハーブも知っておこうとか。お菓子作りをやりたからハーブの勉強をしたいとか。何にも考えずに暮らしていたら、ここには絶対にたどり着かないですよ。問題意識を持って生きている人、自分に対して問いかけているという人でないと、自分が置かれた社会環境とか、仕事を変えてまで、ここには来ません。前の会社でいやな思い出があっけてきたとか、マイナスの気持ちを持ってきた人もいたし、それを前面に出す人もいるし、そうでない人もいるし、それは個性なので、同じように扱おうとは思いませんでした。1年たって、居心地がいいと思っけた人は残りました。ここは、時々みんなの顔を見にくるところだな、と距離を置きながら付き合う人もいます。」

●個性が認められる、やりたいことがやれる

「ここでやる仕事は決まっていますが、これをやりなさい、と上から決めることはないです。研修生が「これをやりたい」と言えば、「やってみんさい」とスタッフは言います。民間企業に比べたら制約が少なくて、クリエイティブな仕事メインな職場です。私も、許容の範囲内なら、研修生がやりたいことは、全部やらせてきました。育苗については言いますが、植え方や配色について、考えが違っけたことがあっても、間違っていると上から言っけたことはありません。自由奔放になんでもやっけてください、と言っけたことはありませんが、監督のもとではあるけれど、その人の仕事の個性に合わせて仕事を変えていきます。」

●一人ひとりを大切にしてくれる職場

「それに、地元の方もここに関わっている人はオープンで、昔の考えを押し付けるというよりは、研修生と目線を合わせていっしょに物事をしていくといったスタンスです。ここで学んだことは、本当に大きかったです。押さえつけられることがなかつたから、常に目標を持っていられました。自分なりに目標を持っていられたら、仕事はおもしろいですが、押しつけられたら、仕事は私のなかでは面白くないものになってしまいます。ここは、その人の役割を大事にしてくれる職場だと思っけたです。その人のやりがい大切にしてくれています。」

■研修生の募集要項（2009年度）

区分	●香木の森園芸福祉コース (1993年から開始)		●農業コース (2000年から開始)
内容	香木の森公園で、育苗やクラフト加工など幅広く体験しながら働きます。		農家で、農業知識や技術・経営ノウハウなどを学びながら働きます。(施設野菜栽培・花卉栽培・菌床椎茸栽培・酪農・果樹栽培)
内容	「栽培スタッフ」 ハーブ育苗、ガーデン管理、販売など。	「クラフト・ガーデニングスタッフ」 クラフト加工、クラフト・ガーデニング指導など。	
定員	2人	2人	2人
期間	研修期間：2009年4月～2010年3月まで（1年間）		
応募条件	年齢は概ね22歳～35歳まで。 心身ともに健康な独身女性。 ハーブ栽培や福祉に関心が高く、町の行事や地域交流に積極的に参加する意欲のある方。 普通自動車運転免許を有する方。 町外にお住まいの方は、住民票を邑南町に移動していただきます。		年齢は概ね22歳～35歳まで。 心身ともに健康な男女。 農業に関心が高く、町の行事や地域交流に積極的に参加する意欲のある方。 普通自動車運転免許を有する方。 町外にお住まいの方は、住民票を邑南町に移動していただきます。
待遇等	滞在費 月額13万円（健康保険等は各自対応、損害保険は町で加入） 就業時間は1日8時間程度。 週休2日（毎週月曜日と土曜日または日曜日） 宿泊は香木の森公園内「香賓館」に入居（バス・トイレ・電化製品・家具付き個室完備。リビング・キッチン共同利用） 家賃・光熱費（3万円）は個人負担となります。 （別途月額5千円の家賃助成金があります）		就業時間は1日8時間程度。 週休1～2日（内容により異なります） 宿泊は町営住宅等に入居（女性は香木の森公園内「香賓館」に入居可能）。 家賃・光熱費は個人負担となります。
応募方法	応募用紙と応募の動機を書いた作文を郵送してください。 ※応募用紙には写真を添付し、希望するコースを記入してください。 ※応募の動機は、原稿用紙2枚（800字）程度に書いてください。		

3. 「香木の森公園」と研修制度の今後の課題と展望

時代の変化を見据えた公園運営と研修制度の見直しに向けて

香木の森公園は、観光施設でありながらも、観光客のためだけの施設でなく、地元住民との友好関係を維持し、地元で育てられてきた。研修制度は単なる定住対策だけでなく、毎年受け入れる研修生によって、新しい風を地域に取り込む手法でもあった。だからこそ、スタッフや指導員は研修生のやりたいことを尊重し、個性を發揮してもらって、自然な形で公園や地元が活性化されればと考えてきた。

また、園芸福祉の場として、これまでに旧石見町が培ってきた福祉活動の流れで発展してきた。香楽市に集う地元の高齢者の憩いの場でもあり、自ずと町への思いを持った人たちが集う場となってきた。

しかし、最近少し状況が変化しつつある。以前と比較し、研修生の応募数が減少し、研

修生と地元住民との交流も少しずつ減ってきた。毎年6人受け入れていた研修生は制度変更で4人に変更。昔は研修生たちが、宿舎の共同場所で食事を作ったが、最近はそういう光景も少なくなり、週末には研修生が実家に帰って静かになることが多くなった。

元研修生は次のように話す。「私たちの頃は、共同生活することにも意義があると思ってきました。具合が悪い人がいたら、私たちは、お粥を作ったり、病院に連れて行ったりしました。今の研修生たちは、『寝てるんだから、そっとしてあげよう』というのがやさしさになっています。」時代の変化とともに、研修生の価値観も変化している。

こうした状況を受けて、担当職員は、研修生制度自体を見直す時期に来ていると話す。農村でいろいろな交流を展開してきた研修制度だったが、今後は、農業研修のように自覚と責任、専門性を持った人材の募集という方向での研修も考慮していきたいとする。

また、邑南町の苦しい財政状況が、将来的に香木の森公園にも影響してくることも考えられる。香木の森公園の次の方向性が見えているわけではないが、転換が求められているのも事実であり、今後も公園を通じて今まで積み重ねてきた福祉や人と人とのつながりを維持していきたいと関係者たちは考えている。